

カフェで自然に政治の話ができる町

和田 静香

「65歳以上のひとり暮らしの女性の相対的貧困率が44.1%にのぼる」という新聞記事を読んだ(朝日新聞, 2024年3月9日)。2040年には、単身高齢女性が540万人に達するともある。私自身、シングルの還暦間近なフリーライターで、生活はいつもギリギリ。これから一体どうなるんだろう?と不安に苛まれ、政治による新たな公助がつけられるのを待っている。そのためには、共感をもって積極的に動いてくれるだろう女性の政治家を増やすことが大切だ。女性議員を増やすことは、暮らしに必須だと考えている。

そこで2022年春から約1年、神奈川県西部にある大磯町に通った。大磯町議会は2003年から男女同数(または女性が多い)状態を続けていて、現状を知りたかった。実際、傍聴に行くと女性たちが議員席に並び、議長も女性(当時)、服装はパンツにラフなジャケットやシャツを合わせ、色合いも多彩なことにまず心が躍った。いざ議会が開会すると、女性も男性も関係なく次々質問が飛ぶ。行政側も資料のページをめくり、どんどん答える。議会は踊る!スリリングで予定調和なしの議論がくり返され、そのおもしろさに魅了された。しかも委員会をのぞけば、「1期目」の若い議員が委員長席に座り、年功序列など関係ないフェアな状態を知る。女性議員へのヤジなど、もちろん聞こえない。傍聴席にはその日の議案資料が誰でも手に取れるよう用意され、開かれた議会があった。

町へ出て、ひとやすみにカフェに入れば初めて会った女性たちと自然に町の議会、政治の話になる。単身女性にも何人も出会い、それぞれ堂々人生を歩む。通りに並ぶお店は花屋もパン屋も飲食店も、気がつけば女性の店主が多く、彼女たちが町の人を横につなぐ催しを積極的に開いていたのには驚いた。

男女同数議会が20年以上続く町では民主主義が機能し、自信をもって生きる女性たちに出会える。やはり女性議員を増やしたい。心からそう願っている。



PROFILE

わだしずか:フリーライター。主にエンタメ中心に書いていたが、40代から仕事が激減、アルバイト生活に。コロナ禍で進退窮まり、生きづらさを国会議員に問う本『時給はいつも最低賃金、これって私のせいですか? 国会議員に聞いてみた。』(左右社, 2021)を出版。以来、生活者目線の政治を書く。最新作は『50代で一足遅れてフェミニズムを知った私がひとりで安心して暮らしていくために考えた身近な政治のこと』(左右社, 2023)。